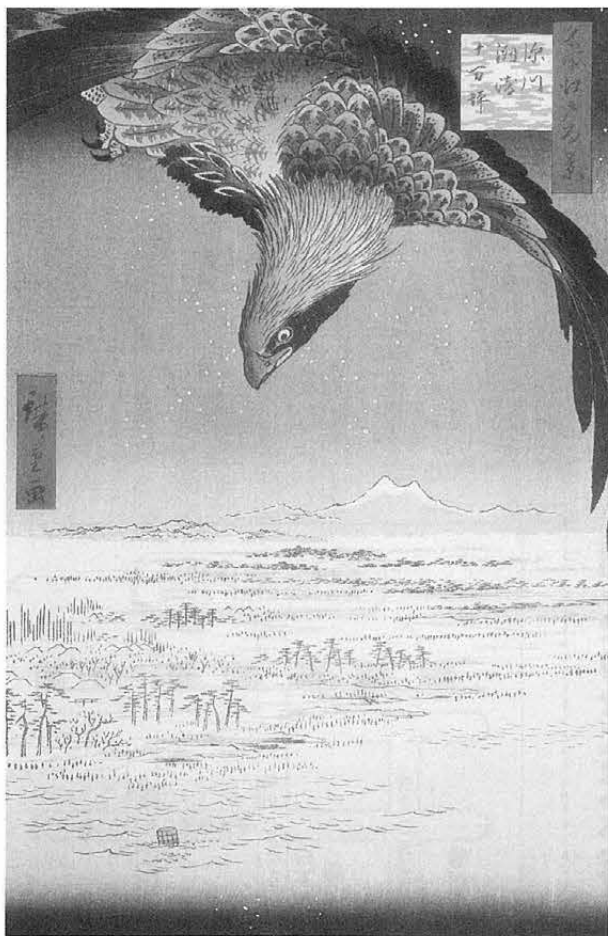


歴史と文化を考えよう

’00 江東区文化財保護強調月間

今年もまもなく文化財保護強調月間を迎えます。教育委員会では、「歴史と文化を考えよう」をテーマに、10月3日から11月5日までの1か月間さまざまな催しをおこないます。歴史と地域のなかではぐくまれた民俗芸能の公開や伝統的な“技”の実演をご覧いただき、あらためて江東区を見つめなおしていただこうというものです。

是非この機会に、江東区の歴史と文化にふれてみてください。



「深川洲崎十萬坪」(歌川広重) 太田記念美術館蔵

文化財保存強化デー
殺虫・燻蒸サービス
公開講演会
10月3日(火)～5日(木)
文化財の保存に向けて
「文化財保存のあり方」
10月4日(水)
「文化財保存の方法」
10月11日(水)

旧大石家住宅特別公開
民俗芸能大会
10月14日(土)～22日(日)
「木場の角乗」ほか
10月29日(日)
伝統工芸展
11月1日(水)～5日(日)
江東区歴史セミナー
11月4日(土)
大江戸線を歩く

下町文化

NO. 211
2000.9.28
発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課

■’00 江東区文化財保護強調月間

民俗芸能大会
殺虫・燻蒸サービス 公開講演会
旧大石家住宅特別公開
伝統工芸展 江東区歴史セミナー
時雨忌(芭蕉忌)講演会

- 民俗調査報告 深川のくらし
- 職人さんのお家で更紗染を体験
～文化財保護と体験学習～
- 江東歴史紀行
★備蓄庫として使用された
毛利家の鶴歩町抱屋敷
- 江東今昔(2) ★亥之堀橋西側
- ここにも歴史があった
★保温用飯櫃入れ

江東区で江戸時代に生まれ、受け継がれてきた民俗芸能を一挙に公開いたします。

民俗芸能は、仕事や日頃の生活のなかから生まれたもので、木場の川並(筏師)がはじめた角乗や労働歌の木遣、佐賀町の倉庫街で働く人がはじめた力持、富岡八幡宮祭礼を彩ってきた手古舞、さらには農村地帯の砂村で生まれた囃子など、いずれも地域に根ざした技といえます。

現在は、それぞれ保存会(睦会)が結成され、技を守り伝えていきます。この機会に、是非ご覧ください。

演目は次のとおりです。

午前11時～12時
午後1時～3時40分

「木場の角乗」 木場角乗保存会



民俗芸能大会
10/29(日)

「木場の木遣」 木場木遣保存会

「木場の木遣念仏」 同

「砂村囃子」 砂村囃子睦会

「獅子舞」 同

「富岡八幡の手古舞」

富岡八幡の手古舞保存会

「深川の力持」 深川力持睦会

*会場は都立木場公園

文化財保存強化デー 10/3(火)～10/5(木)

「殺虫・燻蒸サービス」

文化財係では、皆さんがをお持ちの古文書や絵画、木彫刻などの保存のために、殺虫・燻蒸サービス（24時間）を行います。大切な文化遺産を後世に伝えるため、是非この機会をご利用ください。

文化財係へ電話にてお申し込みください。なお、お持ち込み及び返却の日程は次のとおりです。

場所 江東区芭蕉記念館

持込み 9月30日(土)～10月2日(月)

返却 10月5日(木)午前中

(常盤1-6-3)

ご希望の方は、9月29日(金)までに文

公開講演会 10/4(水)・10/11(水)

「文化財の保存に向けて」

文化財保存に関する2回にわたるお話です。4日は、旧大石家住宅の保存を通して文化財保存のあり方を考えます。11日は日本の風土と伝統的な工芸技法との関係から、文化財や身近にあるモノの保存方法を考えます。

皆さんのご参加をお待ちしています。

〔講演内容〕

講演 文化財保存のあり方

「移動できない文化財の

保存と利用」

講師 江東区建造物調査団 堀内仁之
日時 10月4日(水)

日時 10月11日(水)

午後6時30分～8時30分

会場 教育センター2階 第3研修室

講師 東京国立文化財研究所

名誉研究員

見城敏子

講演 文化財保存の方法

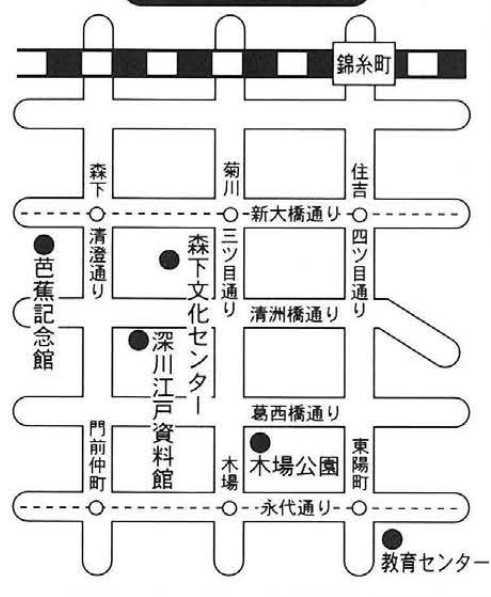
「日本の風土と伝統技法」

会場 教育センター2階 第3研修室

*

参加ご希望の方は、住所・氏名・電話番号を明記のうえ、ハガキ(電話可)で文化財係までお申し込みください。

会場案内図



問合・申込先
生涯学習課文化財係

住所 〒135-8383 江東区東陽4-11-28
☎ 3647-9111 内線3361～3

旧大石家住宅特別公開 10/14(土)～10/22(日)

旧大石家

住宅は、1

50年以上

前に建てら

れた区内最

古の民家で

あり、区の

指定有形文化財となっています。



普段の公開日は土・日曜と祝日ですが、今年度は文化財保護強調月間になみ、右記の期間中に限り、特別に平日も公開いたします。どうぞこの機会に足をお運びください。

場所 旧大石家住宅(南砂5-24地先)

仙台東川公園内ふれあいの森

時間 午前10時～午後3時

江東区歴史セミナー 11/4(土)

大江戸線を歩く——門前仲町から森下へ——

楽しいお話をうかがいながら、門前仲町から森下へと文化財を巡る歴史散歩です。深川不動堂、深川公園、心行寺、芭蕉庵史跡展望庭園、深川神明宮などを探訪し、大江戸・深川の情緒を探ります。必ず新しい発見があるはずです。是非ご参加ください。

日時 11月4日(土)

午後1時～3時30分

集合 富岡八幡宮前
講師 深川江戸資料館学芸員

定員 20人

久染健夫

伝統工芸展 11/7(水)～11/5(日)

展示・解説

森下文化センター(森下3-12-17)を会場に、無形文化財(工芸技術)保持者に認定された職人さんの作品や道具などを展示します。機械生産が主流の現在、伝統的な技術に触れる数少ないチャンスです。

下町の雰囲気を残す江東区には、多くの職人さんが住んでいます。職種も豊富で、木場関係(木彫刻・指物・桶など)や相撲関係(軍配・化粧廻し・足袋)、海関係(投網・和船)などは、地域的な特徴を示しています。



そのほか、漆塗・刺繍・提灯・染織・江戸切子(カットガラス)など、多種多様で、いずれも昔からの技術が守ら

参加費 無料

申込 往復ハガキに住所・氏名・年齢・電話番号を明記のうえ、文化財係までお申し込みください。

締切 10月27日(金)必着

れています。

職人さんの技は、機械とは違って、指の感触や長年にわたって培ってきた勘を大切にします。そのような点に注意しつつ、細かい所までご覧ください。

実演公開

伝統工芸展の期間中の土曜・休日は、職人さんに仕事の実演をお願いします。日頃、見ることでできない職人さんの仕事ぶりに接しながら、お話をうかがうこともできます。ただし、実演は2時間交代で、各時間3人です。もし、興味のある職種がある場合は、別表の日程表をご参照のうえ、ご来場ください。

職人の技の体験コーナー

仕事ぶりやお話をうかがうこととは別に、少しか職人さんを体験することが出来ます。2時間だけの「弟子入り」は、職人さんのアドバイスを受けて、何か作品を作ってみるというもの。このコーナーは、職人さんのご協力により実現しました。この機会に、是非職人体験をしてみたいかがでし

うか。

お知らせは、当日の開始前に会場アナウンスをいたしますので、受付にてお申し込みください。

チャリティーバザール

期間中、森下文化センターの1階ロビーでは、江東区伝統工芸保存会による作品の販売が行われます。販売している方も職人さんですので、気軽にお話をしながら、じっくりとご覧ください。日頃から購入したいとお思いの方、興味をおもちの方は、是非お立ち寄りください。

強調月間協賛事業

時雨忌(芭蕉忌)講演会

10月12日は松尾芭蕉の命日です。芭蕉記念館では、この日にちなんで時雨忌(芭蕉忌)講演会を開催します。

日時 10月8日(日)午後2時より

会場 1階会議室

演題 「芭蕉と信濃そして義仲」

講師 信州大学教授 宮坂静生

定員 80人(先着順)

申込 記念館窓口または電話にて

☎ 3631-1448

伝統工芸展実演日程表

日時	11/3 (金)	11/4 (土)	11/5 (日)
午前10時～12時	裁着袴製作 富永 皓 漆芸 大岩 伸治 江戸切子 小林 英夫	木工(彫刻) 岸本 忠雄 石工 新川 昇 提燈製作 杉田 礼二	足袋製作 箕輪庄太郎 籠製作 豊田 勇 木工(指物) 山田 一彦
午後1時～3時	仕舞袴製作 杉浦 武雄 刺繍(紋章) 天野 一政 染織(更紗染) 更 濱 あめ細工 青木 喜	庖丁製作 吉實庖丁店 手描友禅 和田 宣明 木工(彫刻) 渡辺美壽男 あめ細工 青木 喜	染織(紋章土絵) 石合 信也 江戸切子 須田 富雄 木工(指物) 山田 一彦
午後3時～5時	提燈製作 渋谷 昭男 木工(襖・櫺) 鈴木 延坦 染織(更紗染) 更 濱	三味線駒製作 前田 賢次 刺繍(化粧廻し) 関谷 正一 木工(建具) 木全 章一	

※ は職人の技の体験コーナー(体験される方は教材費が実費となりますので、ご了承ください)

深川のくらし

平成11年度民俗調査から

江東区教育委員会は、昭和59年度より、区内をいくつかのブロックに分けて総合的な民俗調査を行ってきました。昨年度よりは、これらの成果をもとにして、区内を大きく深川・城東の二つの地域に分け、それぞれで調査を行っています。

11年度は深川地域で行いました。ここでは、調査成果のなかから一部をご紹介します。

昔の装いⅡ

○仕事着

ア（魚問屋の息子、明治36年生まれ）
魚市場に行くときは、着物で尻はしょりして帯締めた。履物は、夏は裸足で雪駄を履き、他の季節は裸足足袋や靴足袋、地下足袋などを履いた。真夏は魚が腐らないように、こうもり傘をさした。

イ（蕎麦屋の職人、明治30年生まれ、男性）
股引と屋号の入った半纏。

ウ（左官職人、明治42年生まれ、男性）
半纏を上に着たが、お得意さんへ行くときは、その家からもらった半纏を着た。

オ（川並、明治40年生まれ）
半纏、メリヤス（綿糸で作った伸び縮みする編み物）のシャツ（小僧のうちは着ない）、股引き（小僧のうちは千草へもえぎ色）の股引き、兄い株になって、め



仙台堀川（木場3丁目）と川並

くら縞（紺の織色の綿布になる）、三尺（三尺帯）はもよみの三尺、木綿、色は小僧のうちは青しか締められないが、兄い株になると何色でもよい。兄い株とは3年以上たった人をいう。昔は裸足が多かったが、裸足足袋も履いた。今は長靴を履いている。

オ（海苔製造、明治33年生まれ、女性）
着物に紺（同じ模様をたくさん置いた織物）の道行き（婦人の和服用コート）のような上っぱりを着た。着物は、若い

人は長い着物は着ず、短いものだった。前掛けを締めた。戦争中にモンペが出来て、とても仕事がしやすく、もっと早く出来ていればよかったのと思った。

カ（辻占売り、紙片に様々な吉凶判断の文句を書き記して売る者）
大正昭和のはじめ頃見た、男性、着物を着て尻っぱしより。紺の股引きを履き、白い草履をつっかけて、手拭いを頭にのせて、箱を肩に担いでいた。

キ（新聞社に勤めた男性、記者ではない、明治42年生まれ）
着物に日和下駄（天氣の良い日に履く低い下駄）を履いた。歯入れを2足買っておいて、減ると代わりを出して、とつかえひつかえ履き、下駄の台は10年位使った。

ク（鳥刺しへ鳥もちを塗った竿で小鳥を捕らえる人、明治30年生まれの男性）
が子供の頃、近所で見かけた。震災位までいた。木綿のシャツに腹掛けをして、屋号の入った半纏に、黒い手甲・脚半を付けていた。帽子はチョッペイボウシ（直平帽子）という鳥打ち帽子（平たくて丸い、底の付いた帽子）を被っていた。竹かごを背負い釣り竿を3つか4つ繋いで先にもちをつけたものをつかっていた。味噌蔵や米市場に集まるスズメを刺していた。

○普段着



震災直後の高橋夜店通り（花岡三四子氏所蔵）

ア（商店の娘、明治30年生まれ）
二子木綿の着物に半纏を正月から4月頃まで着ていて、6月から単物。衣替えしたら、それまで着ていたものは洗って張りして、縫返して、次のシーズンに着る。

○よそゆき

ア（刺繍職人、明治34年生まれ、男性）
20才（大正8年へ1919頃、綿紗の羽織や襦袢を着るのが流行した。この人は綿紗の襦袢を作ろうと、本郷3丁目の呉服屋で綿紗の袖を3円か3円50銭出して買い、フランネル（羊毛が主の毛織物）の胴は1円だった。まだ修行中だったので、仕立てを頼むお金は無く、兄弟弟子の奥さんに縫ってもらったという。

イ（夫が海軍省に勤める主婦、明治

43年生まれ）子育て中は何かともの入りで、お金が無く、昭和の始め頃、保護者会に出席する時、単衣ひとえを着る季節ではなかったが、丁度よい着物が無かったので、単衣の紬つむぎ（紬糸で織った絹布）の着物に裾だけ裾廻しをつけて拾あづかにして、エプロンを掛けて出席したという。

Ⅱ 食べものⅡ

○ 日常食

ア（汁粉屋の娘、大正10年生まれ）食事は使用人も家の人も一緒に食べた。まずいものを食べさせると（使用人が）店のものをつまむので、白い米の飯で、出来るだけおいしいものを食べさせた。朝はご飯におみおつけにお新香。

イ（木場の材木商の住み込み店員、大正4年生まれ、男性）朝—ご飯・みそ汁・タクワン、昼—ご飯・みそ汁・魚の切り身など、夜—ご飯とタクワン。

ウ（床屋に生まれ、跡を継いだ男性、明治42年生まれ）朝昼晩ともご飯を食べた。朝食はご飯・おみおつけ・お新香に卵が付けば上等だった。卵はひとつを、父が黄身を食べ、息子は白身に付けて食べた。

エ（左官職人、明治42年生まれ、男性）住み込みで修行中の大正末から昭和の始め頃、親方の前でかしこまって食べた。箱膳を使った。この中に茶碗・お

椀・箸が入っていて、食事の度に洗ったりはしなかった。弁当は自分で詰めて持って行った。

オ（油屋のお嫁さん、明治30年生まれ）大正末から昭和の始め頃の食事は一汁一菜で、煮炊きはガスを使った。朝—ご飯・お汁・漬物、昼—夜よりおかずを食べた。ご飯・お汁・魚など。夜—ご飯・お汁、野菜を煮たり、昼の余りもの。姑はぜいたくな人で自分だけ鶏肉を洋銀の鍋で料理して食べたりしていた。

カ（文房具店の女性、生家も店、明治36年生まれ）朝—ご飯・おみおつけ、海苔や納豆、豆腐・味噌豆など。昼—ご飯・みそ汁・焼き魚か煮物、夜—ご飯・お汁かすまし汁か豚汁などで簡単にした。

キ（米屋、大正5年生まれ、男性）昭和10年（1935）頃は佐賀町に深川正米市場があった。25俵買わないと馬力（荷馬車）が店まで持って来てくれないので、3、4俵買うときは、自分で大八車を持って行った。当時、原価で一俵8円か9円だった。小売りの時は一斗2円＋αで売った。庄内米が一番高く1升32銭、台湾米は18銭だった。朝鮮米（金南浦とか仁川とかの名前）は寿司米として喜ばれた。1升だけ買う人は

夜来た。

ク（会社員、米屋に生まれた、明治40年生まれ）米の仕入れは前蔵か卸屋で買った。玄米で買い揃そろくのは自分の店でした。明治末に米屋4、5軒で共同で精米機を購入し、順番に使った。軟らかい米3俵と硬い米2俵を混ぜて売った。配達は一斗から行い、小僧が担いで持って行った。大八車を使うのは3俵位から。売り方は、店売りの他に通い帳を使って売ったり、置き買い（前の勘定一つもらってあとは貸してくる）なども行った。

○ おかず

ア（床屋、明治42年生まれ、男性）シャコやカレイ、コチなどの魚は、河岸通りの朝市で買った。浦安から船でここに持ってきて、盤台（魚屋が使う浅く広い長円形のたらい）に並べ女の人が



昭和元年(1926)頃の洲崎

売っていた。ワタリガニなど安かったのでお昼にお茶がわりに食べた。

イ（明治44年生まれ、男性、新大橋に生まれ育つ）近くに洋食屋があり、カツが20銭であった。月1回このカツを出前してもらっておかずにできたたら大したものだった。

ウ（明治41年猿江町生まれ、女性）昭和のはじめ頃、家で1か月に1回、おかずにカツをとった。大変楽しみなこと、カツにトマトが付いているのが珍しかった。

エ（明治36年生まれ、男性）洲崎の海岸に漁師がいて、朝行くと船からとれたものを揚げていた。カニやシャコがバケツに山ほど入って、たった10銭だった。

○ 外食

ア（大正元年生まれ、男性）どじょうの伊勢喜が安かった。昭和の始め頃、飯とお汁、お新香で5銭だった。

イ（さくら鍋屋、明治43年生まれ）大正時代に大衆食堂を経営していた。朝食や昼食は、白米のご飯に魚やフライ、煮物などのおかずを付けて、8銭〜10銭で夜は鍋物で、焼酎がよく出た。ご飯は薪で炊き、他のものはコークスを使った。馬力さんや魚河岸に行く人が利用してくれた。朝早くから夜12時頃まで営業した。

職人さんのお宅で

更紗染を体験

文化財保護と体験学習

夏の陽射しが照りつける8月8日、信州大学附属松本小学校の丸山結衣ちゃん(小6)・絵里ちゃん(小1)とご両親が、大島6丁目にある染織(更紗染)「更濱」の仕事を訪れました。「更濱」は江東区指定無形文化財(工芸技術)の保持団体で、出迎えたのは佐野利夫さんと弟の勇二さんです。

更紗染はインド・ペルシャなどを起源とし、日本には、室町時代末にもたらされたといわれます。そして江戸時代中期に江戸で普及しました。かつて江東区は染物業が多い地域でしたが、戦後しだいに減少し、今では更紗染をおこなう型染屋は「更濱」ただ一軒となりました。

さて、松本小学校では、修学旅行の際



に職人さんのお宅を訪問していますが、残念ながら結衣ちゃんは、楽しみにしていた修学旅行に参加できませんでした。そこでご両親が、結衣ちゃんに職人さんの仕事を体験させてあげようと考え、佐野さんのお宅を訪問することになったのです。

この日、丸山さん一家が挑戦するのは、歌川広重の綿絵・東海道五十三次「由比」の図柄です。佐野さんが用意した布地に型紙をのせ、丸刷毛で刷って染めていきます。これを何度か繰り返して色を重ね、作品が完成します。型紙は十数枚使用し、最初、型紙に口で霧を吹いて適度な湿気をあたえますが、これを見た結衣ちゃんは、「お酒を飲んでいるのかと思った」と言っていました。佐野さんに「口で吹くほうが強弱がつけられる」と説明されると、職人さんの技に感心していたようです。丸山さん一家は、見るものすべてが初めてで、佐野さんの話しに熱心に耳を傾けていました。

いざ染めていくとなると、最初はな

かなか難しそうでしたが、佐野さんに「かるく・こまかく・はやく」とアドバイスを受けながら頑張っていました。佐野さんは、刷毛の刷る音で上手いかわかるそうです。何枚か刷り重ねるうちに、側で見ていた私にも、結衣ちゃんがだんだん上手くなっていくのがわかりました。そして、いよいよ作品の完成です。自分の作品を手にした結衣ちゃんと絵里ちゃんは、佐野さんに「上手くてきたね」と言われ、うれしそうに微笑んでいました。

結衣ちゃんに染め上げた感想を聞いてみると、「おもしろかった!」と元気によく応えてくれました。佐野さんと接した数時間は、結衣ちゃんと絵里ちゃんにとって、忘れられない体験になったことでしょう。

「更濱」には、15年程前に新潟県の鳥屋野中学校が修学旅行で訪れ、その後、



4・5年前からさまざまな学校からの見学が増えてきたそうです。現在区内では、数名の職人さんのお宅に、全



完成品を手にする結衣ちゃん(右)と絵里ちゃん(左)

国から生徒さんが来るようになりました。修学旅行で訪問する職人さんは、皆さん伝統的な工芸技術の保持者です。このような職人さんの仕事場で体験入門できることが、人気を呼んだのだでしょう。教室とは違った「学習の場」といえます。

ただし、仕事の合間を見つけないながらの受け入れで、かかる費用は材料費だけです。職人さんのご好意に支えられていることも忘れてはなりません。さまざまな場面で「教育」が問われる現代社会。文化財保護と学校教育、あるいは親子のふれあいのなかでの体験学習、これらが一体化することによって、新たな「学習の場」がうまれてくるのではないのでしょうか。そして私たちを取りまく社会環境も、必ずより良い方向に変わっていくはずです。丸山さんご一家の笑顔を見ながら、いろいろなことを考えさせられました。

江東歴史紀行

備蓄庫として使用された 毛利家の鶴歩町抱屋敷

嘉永5年（1852）尾張屋板の江戸切絵図を見ると、碁盤の目のように整然と掘割が巡らされた木場（木置場）の東側の一画に「松平大膳大夫」とあります。ここは毛利家（萩藩）が独自に購入した抱屋敷です。今回はこの四方を堀に囲まれた孤島のような毛利家の抱屋敷について、山口県文書館所蔵の史料をもとにご紹介します。

現在の木場3丁目にあたるこの地は、平野甚四郎が開発した土地で、はじめ平野新田と号していましたが、享保14年（1729）家作御免の町並地となり、甚四郎の号をとって鶴歩町と称しました。面積は1万8千954坪、明和7年（1770）正月に上田藩主松平伊賀守から譲受けました。

山口県文書館所蔵の吉田樟堂文庫に「江戸深川 鶴歩邸之記」と題する冊子が残されています。天保9年（1838）、安倍惟貞の撰文によるものを後年筆写したのですが、ここでは、鶴歩御屋敷が天保6年（1835）に蔵屋敷として使用するための整備が行わ

れたことについて記されています。

鶴歩町の抱屋敷を蔵屋敷とすることは、天保5・6年のころ、清徳院（10代藩主毛利斉熙）の時はすでに藩主を退き、砂村の抱屋敷に隠居して藩政を補佐していた）の創意を得て計画されましたが、斉熙は天保7年5月に没したので、その後を継いだ斉元（天保7年9月没）敬親によって完成されたことが追記されています。

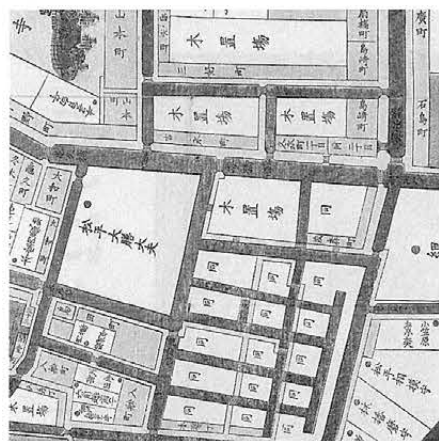
天保6年秋に、それまで汐の干満により掘割の流れが左右され、岸の土が崩れ、船や筏の通航もままならなかった屋敷周辺の堀に、岩垣を高く築き廻したところ、汐の流れもゆるやかになったというところで、蔵屋敷として使用するにあたり、まずは船や筏の航行が容易にできるような整備をしたものと思われま

す。同年冬には、四棟の蔵を建て、船入りの堀を造り、さらに2年後の天保8年冬に、蔵2棟を増築しています。またこの時、斉熙の隠居所として使用されていた砂村の抱屋敷に祀られている

住吉大明神ほかの神々を遷座しました。その中に「おほち稲荷大明神」の名もみられます。この「おほち稲荷大明神」は、砂村新田の砂村稲荷神社であり、この稲荷社を含めた周辺の土地は、寛政年間に毛利家の抱地となりました。とくに疝氣（せんき）の病（下腹痛）に靈験があるとて、別名疝（仙）氣稲荷として、江戸の人々の参詣で賑わった神社です。こうした神社が遷座されたことは、興味深いものがあります。

こうして蔵屋敷として整備された鶴歩町の屋敷には、三千石の米が蓄えられたということです。

江戸に住む藩主の家族や家臣たちのための飯米は、江戸藩邸内の蔵に常時蓄えられていましたが、天保に入り、新たに蔵屋敷を造り、三千石もの米を国許から取り寄せて貯蔵しておく目的は何だったのでしょうか。



本所深川絵図（嘉永5年）

天保年間には、全国的な飢饉の年であり、萩藩領内でも7年6月に大洪水があり、藩の財政に大きな影響を与えました。このような中で藩主を継いだ敬親は、世上の不安定さを感じ、一旦事が起これば、遠く離れた江戸へは容易に物資を送ることが出来ないことから、江戸に物資を蓄えておくことが必要であると説いています（『長周叢書』「忠正公略伝」）。『防長文化史概略』には、鶴歩町の蔵屋敷には、すべての食料物資と建築用材を貯蔵しており、貯木場まで造られていたとあり、食料のみでなく、すべての変災に備え得る、備蓄庫としての役割を担っていたことがわかります。木場に隣接した鶴歩町はまさに最適の場所と言えるでしょう。さらに、長期保存のできない米は、換金して藩の財政の建て直しを図ったものと思われま

す。深川は、水運の便が良いこと、火災等の被害を被ることが比較的少ないこと、加えて藩米を換金する商人の住む地域に近いことから、多くの諸大名が蔵屋敷を所持していました。萩藩の蔵屋敷もこうしたうちのひとつですが、蔵屋敷設置の裏には、深川の地理的条件だけではなく、藩の内情が深くかかわっているのです。

（文化財主任専門員 向山 伸子）

江東今昔(2)

白河と三好の境、深川江戸資料館通りを真っ直ぐ東へ進んだ、亥之堀橋西側たもとの40年前の様子です。

亥之堀とは、扇橋・石島あたりに接する大横川の別称で、元禄8亥年(1695)に掘られたので亥之堀川と呼ばれたそうです。

江東区では、戦災により道路も橋も大きな被害をうけました。その復旧作業は、戦後の財政難や資材不足で、速やかには進みませんでした。写真手前に亥之堀橋の欄干が見えています。この橋は、昭和26年に架けられたのですが、欄干が木造であったことがわかります。

また、道路の舗装も昭和26年から35

年までに急速に進められました。この写真でも、奥のほうは舗装されているように見えますが、橋のたもとのあたりはまだ砂利道が残っています。

右側に建つアパート(現清砂アパート)は、関東大震災後の復興で建てられた旧同潤会アパートで、当時のままの姿を残しています。竣工時には、理想的な住居として申し込みが殺到したとい

います。この写真が写された、昭和30年ごろは、ちょうど戦災の被害から立ち直り、経済成長期へと向かう過渡の一時です。道路には現在のように歩道と車道の区別がありません。道路の奥のほうには、買い物帰りでしょうか白い割ほ

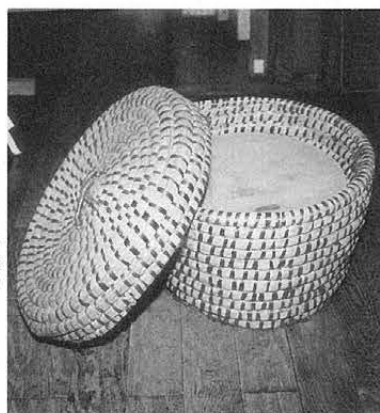
う着をつけた女性が2人並んで歩いています。また右側にはりやカーも見られます。そこには、

先210号の

昭和30年ごろの亥之堀橋西側(上)と現在(下)

「江東今昔(1)」でご紹介した、亀戸駅前のトロリーバスは、京葉道路から明治通りを亀戸駅方向に右折する

ここにも歴史があった



この写真は保温用飯櫃入れです。ふたの直径は47・5cm、高さは29・3cmあります。藁をやや浅い筒形に編み上げた器で、飯櫃をこの中に入れておくと、保温されて、あたたかいご飯を食べることが出来ます。

本来は農作業の間に乳児を入れるための保育器として、戦後まで広く使われ、東北・北陸・中部地方の一部では1950年代ころまで使われていました。大小いろいろ作られ、冬場にはご飯の保温用にも使ったのです。

呼び名はツグラ・キジコ・イズミとさまざまで、イズミは飯詰の意味があります。写真のものは、ふたがあることから、初めから飯櫃入れとして作られたことがわかります。

ご紹介した保温用飯櫃入れは、扇橋1の高橋貞好さんからご寄贈いただきました。

の公開になりました。それだけに、保存会の方々の日頃の練習の成果を、是非まぢかでご覧になってみてください。

ところ。お詫びして訂正いたします。なお、このコーナーに關しまして、ご意見、ご感想、または思ひ出話などございましたら、係までお寄せ下さい。

編集後記

文化財保護とひと言でいっても、その種別によって様々な方法があり、展示や公開もその一つです。文化財保護強調月間中の民俗芸能公開は、毎年区内外から多くの方々にお越しいただいていますが、今年度から区民まつりで

計報

江東区登録無形文化財(工芸技術・木工)保持者野村朝之助氏(88歳、森下1-17-3)は、去る7月23日に逝去されました。慎んで追悼の意を表します。